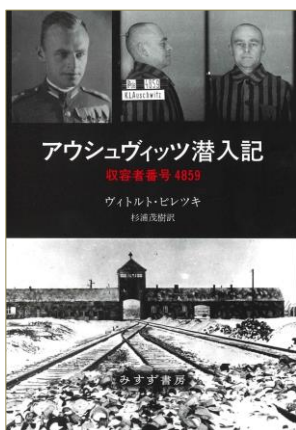


『アウシュヴィッツ潜入記～収容者番号 4859』

ヴィトルト・ピレツキ(著)、杉浦茂樹(訳)

みすず書房
2020.8

第二次大戦が始まった翌年、アウシュヴィッツ強制収容所に自ら志願し、潜入したポーランド人がいた。彼の名はヴィトルト・ピレツキ。1939年、ドイツ軍によるポーランド侵攻直後、ピレツキは騎兵部隊の一員として戦闘に参加し、11月にはポーランド軍の地下抵抗組織であるポーランド秘密軍の創設に加わった。



翌年9月、ピレツキはワルシャワ街頭でのワパンカ(人狩り)に自ら出向いて捕まり、偽名を使ってアウシュヴィッツ強制収容所に潜入した。その目的は収容所内に地下抵抗組織を作り、収容所内の情報を武装闘争同盟に届けるルートを確認し、ポーランド亡命組織を通じてイギリス政府を動かし、アウシュヴィッツを解放に導くことだった。

脱走に成功するまでの948日間、彼は収容者番号4859の囚人となり、そこで過酷な体験をし、非人間的行為を目撃した。それらを証言としてイタリアで『1945年アウシュヴィッツ報告書』にまとめた。その報告書は英訳され、その英訳書から邦訳されたのがこの『アウシュヴィッツ潜入記』である。

報告書には収容所SS隊員の、さらに彼らに操られた一部囚人権力者たちの一般囚人に対する残虐非道な殺戮行為、貨車からガス室に直接連行される人々の様子などが淡々と記されている。淡々とは言っても著者の感情が抑えられているわけではない。ところどころに自身の悲痛な思いもまた記されている。

ピレツキは様々な労務班に所属した。SS幹部宅のストーブを修繕する班、家具やスプーンを作る木工所や製革所、あるいは囚人に送られてきた小包の管理班、そして脱走直前に潜り込んだのがパン焼き班だった。中でもとりわけ過酷だったのが、収容所の外で肉体労働にあたる班だった。

比較的、楽な労務班もあり、その一つが収容所内に作られたオーケストラだった。ナチス幹部にはクラシック愛好者が多かったことから、楽器を弾ける囚人が集められ、まずは男性オーケストラが作られ、その後、女性オーケストラが



編成された。他に比べてオーケストラ隊員の生活環境は格段に良く、生き延びる可能性は高かった。それ故に隊員たちはナチス協力者というレッテルを貼られ、それがトラウマとなって解放後も元隊員たちを苦しめた(詳細は拙訳『強制収容所のバイオリニスト』ヘレナ・ドゥニチ-ニヴィンスカ著、新日本出版社2016を参照)。

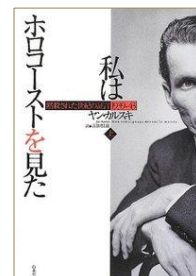
収容所内部での組織作りは少しずつ進み、ピレツキが何度かの危機を乗り越えることができたのは仲間による援護があったからだ。カトリック教徒としての信仰心、祖国を思う強い愛国心もまた支えとなった。しかし、収容所外の無知からくる沈黙は大きな痛手となり、1943年復活祭に二人の仲間とともに脱走を決行、成功した。

その後、ピレツキはワルシャワで抵抗活動を続け、1944年のワルシャワ蜂起に参加。その時ドイツ当局に身柄を拘束され、捕虜生活を送った。やがて解放の日を迎えると、唯一の亡命政府軍が残っていたイタリアへと向かい、そこでこの報告書を書いたのである。



ナチス時代を生き延びたピレツキの抵抗活動はこれで終わりではなかった。戦後は反スターリニズムの活動家となり、その結果、国家反逆罪で逮捕され、同胞によって抹殺された(これについては小林公二著『アウシュヴィッツを志願した男』講談社2015に詳しい)。W・ピレツキはポーランド体制転換のあと1990年に名誉回復された。

第二次大戦の英雄と讃えられているポーランド人はまだいる。ワルシャワ・ゲットーや強制収容所に潜入してピレツキ同様にナチスによるユダヤ人虐殺の目撃者となり、その体験を世界に伝えたヤン・カルスキである。彼の著書『私はホロコーストを見た』吉田恒雄訳、白水社2012もまた貴重なノンフィクション作品である。



(田村 和子、ポーランド児童文学翻訳家)